

往還分齊

ノート

2018/06/12

本願寺名古屋別院にて

山上正尊案

資料	1
二〇一八(平成三〇)年度 提要	1
二〇〇三(平成一五)年度 提要	1
二〇〇三(平成一五)年度 判決	2
会読案	4
〔題意〕	4
〔出拠〕	4
類文	4
〔釈名〕	5
〔義相〕	10
一、往相の本義	10
二、還相の本義	20
三、往還の境目	21
四、現生往生と信後還相の異義(未稿メモ)	21

## ■二〇一八(平成三〇)年度 提要

〔題意〕

往相回向と還相回向の二種回向について、往相と還相の区別を明確にし、信心獲得の一念に往相・還相が回向されるといふことの意義を明らかにする。

〔出拠〕

『教行信証』『教文類』

〔釈名〕

「往」「還」「分齊」

〔義相〕

一、往相の本義

①難思議往生

②即得往生

③回向

二、還相の本義

三、往還の境目

四、現生往生と信後還相の異義

## ■二〇〇三(平成一五)年度 提要

一、往還分齊

〔題意〕

真宗教義の骨組みを形づくる往相回向と還相回向の二種回向について、往相と還相の位置づけの区別を明確にして、両者の位置づけの混乱から生じる誤った見解におちいらぬよう注意をうながす。

〔出拠〕

『本典』『教文類』真宗大綱の文

その他、論議にあたって文証等に用いる文は、必要に応じてその都度出すこと。

〔釈名〕

「往」「還」「分齊」「往還分齊」

〔義相〕

①往相の意義

②現生往生の諸説

③現生往生説の当否

④還相の意義

⑤信後還相の諸説

⑥信後還相説の可否

## ■二〇〇三(平成一五)年度 判決

〔題意〕

会読論題提要に示すごとくであるが、要をとっていえば、往相と還相の位置づけの区別を明確にするところにある。

〔出拠〕

『本典』『教文類』真宗大綱の文に

謹案浄土真宗、有二種回向。一者往相、二者還相。

つつしんで浄土真宗を案ずるに、二種の回向あり。一つには往相、二つには還相なりとある。

〔釈名〕

「往」とは往相すなわち往生浄土の相、「還」とは還相すなわち還来穢国の相、「分齊」とはそれぞれの意義の範囲、すなわち位置づけを意味する。まとめて言えば、「往還分齊」とは、真宗教義における往相(往生浄土の相)・還相(還来穢国の相)それぞれの意義の範囲、またその位置づけという意味である。

〔義相〕

往相すなわち往生浄土の意義は、無有出縁の凡夫が阿弥陀如来の本願力によって真実報土に往生し無上涅槃の極果を証することにある。聖道門の此土入聖に別した彼土得証の往生浄土門であるから、此土の生・彼土の生の区別は明確であり、此土の生の終わりが彼土の生の始まりと位置づけられる。

ところで、信心生活や正定聚の自覚道を往生と位置づけ、現生において往生を語り、当来の往生を否定する説が存在する。宗祖は『一念多念証文』や『唯信鈔文意』において、本願成就文の「即得往生」を信一念即時の入正定聚と解釈されておられる。一方、宗祖が命終時において往生を語られる文は枚挙に遑がない。就中十月六日付真仏宛・二月廿五日付浄信宛のご消息には、信一念即時の現生の利益である入正定聚・諸仏護念を往生已前の利益と示されていること等により、宗祖においては当来の往生こそが本義であることは明確である。また、此土入聖の聖道門と別した彼土得証の法門である浄土門においては、此土・彼土の峻別こそが生命線であるということが出来る。

還相すなわち還来穢国の意義は、本願力によって得証する無上涅槃に本来具せられている悲用である。

この還相の利益についても現生で語る説が存在する。すなわち、現生は往生成仏への道

という自利、当来は往生後の衆生教化という利他との区別は自利即利他・利他即自利という大乘菩薩道に反するものであるとして、浄土真宗が大乘の至極である以上自利の往相においてそのまま利他の還相を語らなくてはならないとするものである。しかし、還相とは「証文類」還相回向釈に引用される『浄土論』・『往生論註』には「遊戯神通至教化地（神通に遊戯して教化地に至る）」・「得奢摩他毘婆舍那方便力成就（奢摩他・毘婆舍那・方便力成就することを得て）」とあるように高度の救済能力の發揮であり、「浄土和讃」には「釈迦牟尼仏のごとくにて 利益衆生はきはもなし」と釈尊と同等の利他活動と位置づけられている。このような利他活動は凡夫には不可能であり、現生に還相を語ることができないのは明らかである。

往生浄土の相である「往相」において、往生とは命終即時の事態であり、還来穢国の相である「還相」とは往生即成仏の証果にともなう自在の救済活動をいう。両者の位置づけを明確にして、宗祖教義に於いては現生の往生や信後の還相が成り立ちえないことを確認しておく。

■【題意】

浄土真宗の綱格である二回向四法のはたらきを窺い、現生往生・信後還相に簡ぶ。

■【出拠】

『教文類』(二、九)

謹デ按ニスルニ浄土真宗ニ、有ニ二種ノ回向ナリ。一者往相、二者還相ナリ。就ニテ往相ノ回向ニ有ニ眞実ノ教行信証一。

□類文

『略典』(二、二六二)

然ルニ本願力ノ回向ニ有ニ二種ノ相一。一者往相、二者還相ナリ。

『一念多念文意』(二、六六二)

「即得往生」といふは、「即」はすなはちといふ、ときをへず、日をもへだてぬなり。また「即」はつくといふ、その位に定まりつくといふことばなり。「得」はうべきことをえたりといふ。眞実信心をうれば、すなはち無碍光仏の御ころのうちにオサメトリタマフトナリ 撰取ヲして捨てたまはざるなり。撰はをさめたまふ、取はむかへると申すなり。をさめとりたまふとき、すなはち、とき・日をもへだてず、ワウシヤウスベキトサカマルナリ 正定聚ニの位につき定まるを「往生を得」とはのたまへるなり。

『論註』起観生信章 回向門(一、四九二)

云何が回向する。一切苦悩の衆生を捨てずして、心につねに願を作し、回向を首となす。大悲心を成就することを得んとするが故なり。

回向に二種の相あり。一には往相、二には還相なり。往相とは、おのが功德をもつて一切衆生に回施して、共に彼の阿弥陀如来の安楽浄土に往生せんと作願するなり。

還相とは、かの土に生じをはりて、奢摩他・毘婆舍那を得、方便力成就すれば、生死の稠林に回入して一切衆生を教化して、ともに仏道に向かふなり。もしは往、もしは還、みな衆生を抜きて生死海を渡せんがためなり。このゆゑに「回向を首となす。大悲心を成就することを得んとするがゆゑなり」といへり。

『信文類』欲生釈 引文(二、八八)

へいかんが回向したまへる。一切苦悩の衆生を捨てずして、心につねに作願すらく、回向を首として大悲心を成就することを得たまへるがゆゑにとのたまへり。

回向に二種の相あり。一つには往相、二つには還相なり。往相とは、おのが功德をもつて一切衆生に回施したまひて、作願してともにかの阿弥陀如来の安楽浄土に往生せしめたまふなり。

還相とは、かの土に生じをはりて、奢摩他・毘婆舍那方便力成就することを得て、生死の稠林に回入して一切衆生を教化して、ともに仏道に向らしめたまふなり。もしは往、もしは還、みな衆生を抜いて生死海を渡せんがためにしたまへり。このゆゑに「回向為首得成就大悲心故」とのたまへり。

■〔釈名〕

Q 「往還分齊」の字義如何。

A (諸橋大漢和辞典 抜粋)

「往」

①ゆく

めぐしてゆく

往 (文字鏡&M072386;)

いたる

往は至也

おとづれる

訪問

さる

去

にげる

亡去

死ぬ

②みちのり

行程

③むかし

既往

④のち

後

⑤いたす。やる。つかはす。物を以て人に致す

等

「還」

①かへる

たちかへる。もどる。

復

ふりかへる

顧

しりぞく

退

帰路につく。ふるすにかへる

等

「分」

①わかっ。わける。

〔楚辞、天問〕何往宮<sub>三</sub>班<sub>三</sub>祿<sub>三</sub>。不<sub>三</sub>但<sub>三</sub>還<sub>三</sub>来<sub>三</sub>。

たちわける

分別

二つにする

分半

とく。はなす。

分解

へだてる

分隔

あたへる

施

くぼる

賦

あきらかにする

分判

②わかれる

ふたつになる

分半

ちる、ばらばらになる

分散

さける

分裂

はなれる

分離

③ちがひ

區別

等

「分際」①けぢめ。分限。分直。②身の程。身分。

「齊」

①そろふ②ひとしい③おなじ④ととのふ⑤そなはる⑥ひとしく⑦正しい⑧なか⑨つらねる

⑩わかつ わかれる

〔易、繫辭上〕齊、猶言<sub>レ</sub>弁也

⑪かぎる。かぎり。ほどあひ。

制限

Q 「往」とは何を指すか。

A 「往相」。往生浄土の相状。衆生が阿弥陀仏の浄土にゆきうまれるすがた。

Q 往生浄土とは如何。

A 『大経』成就文

「諸有衆生聞其名号信心歡喜乃至一念至心廻向即得往生住不退転」

『觀経』上品（一、九二）

「上品上生者、若有衆生願生彼国者、發三種心即便往生」

『法華経』第六薬王品（T9、54c）

T0262\_09.0054c01: 於此命終。即往安

T0262\_09.0054c02: 樂世界阿彌陀佛大菩薩衆圍繞住處。生蓮

T0262\_09.0054c03: 華中寶座之上。

「此に於て命終せば、即ち安樂世界の阿弥陀仏の大菩薩衆に圍繞せられてたまふ住処に往きて、蓮華の中の宝座の上に生ず。」

『往生要集義記』（良忠。浄土宗全書一五、一五八）

J15\_0158B24:

●往生者捨此往彼生池蓮華

J15\_0158B25:

中言通於諸受生然諸教所勸偏在極樂故以總

J15\_0158B26:

言而屬別名

「往生とは此を捨てて彼に往き、蓮華の中に生ず。言は諸の受生に通ずれども、然かも諸教に勸むる所は偏に極樂に在り。故に總言を以て而も別名に属す。」

『銘文』（二、六〇八）

「必得超絶去往生安養国」を釈して

「超」はこえてといふ。「絶」はたちすてはなるといふ。「去」はすつといふ、ゆくといふ、さるといふなり。娑婆世界をたちすてて流転生死をこえはなれてゆきさるといふなり。安養浄土に往生をうべしとなり。

Q 往生浄土の「相状」とは如何。

A 教行信証。

【参考】

『往生要集（大綱）』（真聖全四、三九三）

二釋題目（號）者言「往生」者捨此往彼蓮華化生。草菴瞑目之間便是蓮臺結跏之程時。即從彌陀佛（聖衆）後在菩薩衆中一念之頃得生西方極樂世界故言往生也。次要者此「集」中雖有念佛諸行二門而以諸行不爲其要。即但以念佛

【参考】望月仏教大辞典「往生」

オウジョウ 往生 〔彌〕 往いて淨土に生るるの意。無量壽經卷下に「至心に廻向して彼の國に生ぜ

んと願せば、即ち往生することを得て不退轉に住す」と云ひ、觀無量壽經に「三種の心を發さば即便往生す」と云ひ、又法華經第六樂王品に「此に於て命終せば、即ち安樂世界の阿彌陀佛の大菩薩衆に圍繞せられ給ふ住處に往きて、蓮華の中の寶座の上に生ず」と云へる即ち其の説なり。但し往生の語は廣く三界六道並に諸佛の淨土に受生することにも通ずと雖も、彌陀淨土の説盛なるに及んで、主として極樂に受生することを意味するに至れり。良忠の往生要集義記第一に「往生とは此を捨て、彼に往き、蓮華の中に生ず。言は諸の受生に通ずれども、然かも諸教に勸むる所は偏に極樂に在り。故に總言を以て而も別名に屬す」と云へる其の意なり。往生の意義に關しては、往生論註卷下に「彼の淨土は是れ阿彌陀如來の清淨本願無生の生なり、三有虛妄の生の如きには非ず。何を以て云ふとならば、夫れ法性は清淨にして畢竟無生なればなり。生と言ふは是れ得生者の情ならくのみ」と云へり。是れ極樂の生は三界受生の相に同じからず、即ち無生の生を往生と名づくとなすの意なり。又釋淨土群疑論第二には「問うて曰はく、彼の西方に生ずとは、過去の心にて生ずとせんや、現在の心にて生ずとせんや、未來の心にて生ずとせんや。（中略）釋して曰はく、三世を以て推するに、已に滅し、未だ生ぜず、及び現は住せず。生の理眞實に得べきことあることなし。猶ほ燈炷の如し。（中略）今茲の穢土を捨て、彼の淨方に生ぜんことを勸むるは、第一義諦の中に於ては、三世に之を推するに竟に往生の義なけれども、世諦の因縁假名の生滅には、此の娑婆を捨て、佛國に往生することなきに非ず」と云へり。是れ第一義諦よりいへば生の義なきも、世諦の上には捨此往彼の義あることを説けるものなり。天台

及び禪家等に於ては唯心の彌陀、己心の淨土を説き、捨此往彼を批難せるも、善導等の淨土家に在りては指方立相を旨とし、命終の後實に西方淨土に往生するものとなせり。就中、眞宗にては、往生を現生正定聚の位に約することあり。教行信證六要鈔第五に往生禮讚偈の前念命終後念即生の文を釋して「前念とは往生を得る利益の速疾なることを明かす、或は如彈指頃即生彼國と云ひ、或は如一念頃即生彼國と云ふは其の義なり。但し我が上人別に一義を存じたまふ、愚禿鈔に云く、本願を信受するは前念命終、即得往生は後念即生なりと。是れ平生業成の義に就いて横超頓速の益を顯す所なり」と云ひ、又一念多念證文に「正定聚の位につき定まるを、往生を得とはたまへるなり」と云へる其の意なり。又西山派にては、觀無量壽經に「若し衆生ありて彼の國に生ぜんと願じ、三種の心を發さば即便往生す。（中略）復た三種の衆生あり、當に往生を得べし」と説くに依りて、往生には即便往生、當得往生の二種ありとせり。即ち即便往生は、平生に三心を發し、現生に於て速に無生身を證得する所謂即得往生の現益にして、鎮西派が即を異時即と立つるに對して同時即の義とす。當得往生は、臨終に聖衆の來迎を被り、穢土を捨て、彌陀の報土に往生する當益を稱したるものとす。證空の定善義他筆鈔卷上に「此世とは即便往生を云ひ、後世とは當得往生を云ふ。證得往生を即便と云ひ、當得は來迎なり」と云へる是れなり。又眞宗に於ては、觀經の即便往生を分つて即往生、便往生の二種とし、第十八願の對機が彌陀の一眞報土に往生するを即往生と名づけ、第十九、第二十願の對機が化土に往生するを便往生と稱せり。教行信證第六に「二種の往生といふは、一には即往生、二には便往生な

り。便往生といふは即ち是れ胎生邊地雙樹林下の往生なり、即往生といふは即ち是れ報土化生なり」と云ひ、愚悉鈔卷下に「又二種の往生あり、一に即往生、二に便往生なり。乃至、即往生とは斯れ則ち難思議往生眞の報土なり、便往生とは即ち是れ諸機各別の業因果成の土なり、胎宮邊地懈慢界雙樹林下往生なり、亦難思議往生なり」と云へる即ち其の意なり。此の中、難思議往生は第十八願に依る眞土往生、雙樹林下往生は第十九願に依る化土往生、難思議は第二十願に依る化土往生を意味するなり。三經往生文類には又此の三種を三經に配し、大經往生、觀經往生、彌陀經往生と稱せり。又西方指南鈔卷下末には、四種往生の説を出だせり。一に正念念佛往生、二に狂亂念佛往生、三に無記心往生、四に意念往生なり。安心決定鈔卷末に「四種の往生といふは、一には正念往生、阿彌陀經に心不顛倒即得往生とくこれなり。二には狂亂往生、觀經の小品に説きてのたまはく、十惡破戒五逆、はじめは臨終狂亂して手に虚空をにぎり、身よりしろきあせをながし、地獄の猛火現ぜしかども、善知識にあふて、もしは一聲、もしくは一念、もしくは十聲にて往生す。三には無記往生、これは群疑論にみえたり、このひといまだ無記ならざりしとき、攝取の光明にてらされ、歸命の信心おこりたりしかども、生死の身をうけしより、しかるべき業因にて無記になりしかども、往生は他力の佛智にひかれてうたがひなし。(中略)四には意念往生、これは法鼓經にみへたり。こゝろにいでしてとなへずとも、こゝろに念じて往生するなり。この四種の往生は黒谷の上人の御料簡なり」と云へり。蓋し此の中第三の無記往生は、群疑論第七に「修福の後多日未だ死せず、其の人更に重罪を造らず、時として諸の無記

心を起すも、此の心は善惡の報を招くこと能はざるが故に、前の念佛に乗じて即ち往生を得べし」と云ふの説を指し、第四の意念往生は、安樂集卷下に「法鼓經に言はく、若し人命終の時、念を作すこと能はず、但だ彼の方に佛ありと知りて往生の意を作せば、亦往生を得るなり」と云ふの文に依るなり。安心決定鈔には更に「よのつねには、くはしくこのことを知らずに、臨終の念佛まふさず、また無記ならんは往生せずと云ひ、名號をとらばば往生とおもはざることもあらんずれども、それはなほおほやうなり。五百の長者の子は、臨終に佛名をとらばりしかども、往生せざりしやうに、臨終にこゝろいだすと、歸命の信心おこらざらんものは、人天に生ずべしと守護國界經にみへたり。さればたゞさきの四人ながら、歸命の心おこりたらば、みな往生しけるにてあるべし」と云へり。是れ四種の往生は皆歸命の信心に依りて得らるべきものとす、以て鎮西派が稱名念佛を先とするを批議したるものと謂ふべし。又樂邦文類第四、諸家念佛集第四、唯信鈔文意往生記、末燈鈔、釋淨土二藏義第十一、口傳抄卷中、念佛得失義等に出づ。

**オウジョウ イン 往生院** 寺名 河内國中河内郡枚岡村字六万寺に在り。岩瀧山と號し、俗に楠公の寺と稱す。天平十七年行基の創建にかゝり、聖武天皇の勅願所と傳へ、宇多天皇食邑三十餘町を賜ふ。古くは六萬寺と稱し、七堂伽藍輪奐の美を極めしが、屢祝融の災に罹りて荒廢に歸し、長曆年間安助之を修興し、更に一字を建立して往生院と改む。正平三年楠正行當寺に籠り、四條駿の戰に際し、高師直の兵火を被りて伽藍燒亡し、寺領沒收せらる。後承應年間屬司信秀、欣譽上人をして再建せしめ、位牌寺として寺

- Q 「還」とは何か
- A 「還相」。「還來穢國の相狀」と「從果還因の相狀」の二義がある。
- Q 二義を説明せよ。
- A 「還來穢國の相狀」は、淨土に往生したものが、大悲をおこして、生死の穢國に還りきたつて、衆生を救済するすがた。
- A 「從果還因の相狀」は、往生即成仏と仏果を究竟したものが、菩薩としての因相、即ち五功徳門を示現して、自利利他していく姿
- Q 「還來穢國」の語の文証如何。
- A 『法事讚』轉經分 (一、八三二)

誓ひて弥陀の安養界に到り、穢国に還来して人天を度せん。願はくはわが慈悲際  
限なくして、長時長劫に慈恩を報ぜん。

Q 浄土に往生したものが還来穢国する相状如何

A 「還来穢国」の相状は、菩薩が智慧を完成して、生死を離れつつ、大悲を以ての故に、  
生死界に回入して、衆生を救い、共に仏道に向わしめることである。

Q 文証如何

A 『論註』起観生信 回向門（一、四九三）

「還相」とは、彼の土に生じ已りて、奢摩他・毘婆舍那を得、方便力成就すれば、  
生死の稠林に回入して一切衆生を教化して、共に仏道に向かふなり。もしは往、  
もしは還、みな衆生を抜きて生死海を渡せんがためなり。

Q なぜ「従果還因の相状」を言わねばならないのか。

A 宗祖義では、浄土の菩薩は従因向果の行者では無く、ひとたび仏果を極め滅度に至つ  
た者が、再び因果の相を現して、五果門を修する菩薩の相を現したものとみる。還来穢国  
のすがただけでなく、浄土で自利の行を修しているすがたも含めて還相の菩薩としている。  
したがって、この菩薩は従果還因の菩薩であると言わねばならない。  
詳しくは義相に譲る。

A Q 聖教における「分齊」の語例如何。

『観経』水想観（一、八二）

瑠璃地の上に黄金の繩をもつて雑廁間錯し、七宝をもつて界さかひて分齊分  
明なり。

『観経疏』玄義分（一、六五六）

第七に韋提の、仏の正説を聞きて益を得る分齊を料簡す。

『同』同（一、六七八）

同右

『同』玄義分（一、七一〇）

「阿弥陀仏不遠」といふは、まさしく境を標してもつて心を住むること  
を明かす。すなはちその三あり。一には分齊遠からず。これより十万億  
の刹を超過して、すなはちこれ弥陀の国なることを明かす。

『同』定善義 水観（一、七二八）

三に「瑠璃地上」より下「分齊分明」に至るこのかたは

『同』定善義 勢至観（一、七五四）

総じて分齊を結することを明かす。

『同』散善義中下品（一、七八二）

臨終に仏法に遇逢ふ時節の分齊を明かす。

『化身土文類』外経釈 起信論引文（一、二四二）

あるいはまた人をして食に分齊なからしむ。

（齊の左訓 キワ）

Q 「往還分齊」の釈名如何。

A 往生浄土の相状と還来穢国・従果還因の相状の区別を明確にする。

よ  
普賢の徳  
從果還因の菩薩

(平成15年判決)

「往」とは往相すなわち往生浄土の相、「還」とは還相すなわち還来穢国の相、「分齊」とはそれぞれの意義の範囲、すなわち位置づけを意味する。まとめて言えば、「往還分齊」とは、真宗教義における往相(往生浄土の相)・還相(還来穢国の相)それぞれの意義の範囲、またその位置づけという意味である。

## ■〔義相〕

### □一、往相の本義

#### ①の1 難思議往生(語義)

Q 出拠『教文類』に言われる「往相」はどんな往生か。

A 方便に簡んで真実報土に往生することをいう。これを難思議往生という。

Q 難思議往生の典拠を挙げよ。

A

『行文類』偈前の文(二、五九)

【101】 おほよそ誓願について真実の行信あり、また方便の行信あり。

その真実の行の願は、諸仏称名の願なり。

その真実の信の願は、至心信樂の願なり。これすなはち選択本願の行信なり。

その機はすなはち一切善悪大小凡愚なり。

往生はすなはち難思議往生なり。

仏土はすなはち報仏・報土なり。

これすなはち誓願不可思議一実真如海なり。『大無量寿経』の宗致、他力真宗の正意なり。

『証文類』標挙(二、一三二)

必至滅度之願

難思議往生

『真仏土卷』真仮对弁(二、一八〇)

往生といふは、『大経』(上)には「皆受自然虚無之身無極之体」とのたまへり。

〔以上〕『論』(浄土論)には「如来浄華衆正覚華化生」といへり。

また「同一念仏無別道故」(論註・下)といへり。〔以上〕

また「難思議往生」(法事讚・上)といへるこれなり。

『愚禿鈔』三経宗致(二、二八五)

『法事讚』に三往生あり。

一には、難思議往生は、『大経』の宗なり。」

二には、双樹林下往生は、『觀経』の宗なり。」

三には、難思議往生は、『弥陀経』の宗なり。」

『三経往生文類』大経往生

Q 難思議とはどういう意味か。

A 分別思議で思度できない。心と言葉が及ばない。

『六要鈔』(真聖全一、三二〇)

問う。此の往生を嘆じて難思議と云う。其の意如何。

答う。仏を不可思議光仏と号す。彼の誓願に帰して往生を得るが故に、往生の徳を指して難思議と云う。是則ち罪悪生死の凡夫、無有出離之下機、偏に仏力に由て報法高妙の浄土に入ることを得。更に凡心之思度する所に非ず、口言之及ぶべき所に非ず。是の故に嘆じて難思議と言う也。

Q 難思議往生の因果は？

A 因 名号領受の信。

果 利他円満の妙位、無上涅槃の極果(二、一三三)

Q どこが難思議なのか。

A 因果ともに難思議。

Q 名号領受の信心が難思議なる理証如何。

A 真如の徳たる名号を信受しているから。

Q 名号が真如であるという文証如何。

A 『行文類』大行出体(二、一五)

真如一実功德宝海

Q 利他円満の妙位、無上涅槃の極果が難思議なる理証如何。

A 真如の故に。

Q 文証如何。

A 『証文類』必至滅度の転釈(二、一三三)

必ず滅度に至るはすなはちこれ常楽なり。

常楽はすなはちこれ畢竟寂滅なり。

寂滅はすなはちこれ無上涅槃なり。

無上涅槃はすなはちこれ無為法身なり。

無為法身はすなはちこれ実相なり。

実相はすなはちこれ法性なり。

法性はすなはちこれ真如なり。

真如はすなはちこれ一如なり。

Q 誰にとつて難思議なのか。

A 因人。十地の菩薩と雖も難思議。

『玄義分』(一、六五七)

また仏の密意弘深なり、教門曉めがたし。三賢・十聖も測りて闕ふところにあらず。いはんやわれ信外の軽毛なり、あへて旨趣を知らんや。

※ 三賢（十信・十行・十廻向）・十聖（十地）

Q 思議できる往生があるのか。

A それを化身土文類に明かしてある。（二、一八二）

〔無量寿仏觀經之意〕

至心發願之願（邪定聚機

双樹林下往生）

〔阿弥陀經之意也〕

至心回向の願（不定聚機

難思往生）

いまこの論題に於いては、化身土文類の往生は取り扱わない。

【参考】『化身土文類』觀經隱顯（二、一九五）

二種の往生とは、一つには即往生、二つには便往生なり。

便往生とはすなはちこれ胎生辺地、双樹林下の往生なり。

即往生とはすなはちこれ報土化生なり。

## ①の2 難思議往生の相状

Q 難思議往生したらどんな身になるのか。

A 「利他円満の妙位、無上涅槃の極果」〔証文類〕二、一三三）

「自然虚無之身無極之体」「如来淨華衆正覺華化生」〔真仏土文類〕二、一八〇）

Q 文意如何。

A 利他円満の妙位 利他を完成する

無上涅槃の極果 自利を完成する

自然虚無之身無極之体 あらゆる相・かたちを超え離れた覺りの身

如来淨華衆正覺華化生 阿弥陀仏と同じ正覺をさとする

（高田慈昭和上『往生意義』昭和55年専精舎）

問う 蓮華臺上に化生すると云うのはいかなる事か。

答え 迷界の四生を離れて仏の悟りの世界に生まれて成仏する事である。

問う 蓮華臺上に化生する事がどうして成仏する事を願わすのか。

答え 天親菩薩の『淨土論』に「如来淨華の衆正覺の華より化生す」と述べられており、淨土の眷屬はみな阿弥陀如来の正覺の華より化生すると云われてあるように、悟り、即ち成仏を意味するのである。

問う 悟りを意味する言葉として「化生」と云う言葉を用いたのは何故か。

答え 二義有り。一つには実有の生に対して云うのであって生即無生の生なる事を願わす為である。二つには仏智疑惑の胎生に対して 本願を信受する者には、往生と同時に仏の莊嚴身相、即ち大涅槃の果相が頓に顯れることを「化生」と云ったのである。

Q 生まれたら死があるのか。  
A ない。無生の生であって仮に生と名づけたものだ。

『論註』上 願生問答 (一、四五四)

問ひていはく、大乘経論のなかに、処々に「衆生は畢竟無生にして虚空のごとし」と説けり。いかんが天親菩薩「願生」といふや。

答へていはく、「衆生は無生にして虚空のごとし」と説くに二種あり。一には、凡夫の謂ふところのごとき実の衆生、凡夫の見たところのごとき実の生死は、この所見の事、畢竟じて所有なきこと、亀毛のごとく、虚空のごとし。

二には、いはく、諸法は因縁生のゆゑにすなはちこれ不生なり。所有なきこと虚空のごとし。天親菩薩の願ずるところの生は、これ因縁の義なり。因縁の義のゆゑに仮に生と名づく。凡夫の、実の衆生、実の生死ありと謂ふがときにはあらず。

『論註』下 觀察体相章 入第一義諦 (一、五〇四)

建章に「歸命無礙光如来願生安樂国」といへり。このなかに疑あり。疑ひていはく、「生」は有の本、衆累の元たり。生を棄てて生を願ず、生なんぞ尽くべきと。

この疑を釈せんがために、このゆゑにかの浄土の莊嚴功德成就を觀ず。かの浄土はこれ阿弥陀如来の清浄本願の無生の生なり。三有虚妄の生のごときにはあらざることを明かすなり。なにをもつてこれをいふとならば、それ法性は清浄にして畢竟無生なり。生といふはこれ得生のひとの情なるのみ。生まことに無生なれば、生なんぞ尽くるところあらん。

Q 難思議往生はいつするのか。  
A 臨終一念の夕べ大般涅槃を超証す。(二、一〇三)

② 即得往生(いつ往生するのか)

Q 本願成就文に「即得往生」とある。現益か当益か。  
A 両義あり。

即 異時即。時は別であるが、同一人である。体が一つである。  
往生 「若不生者」の成就。難思議往生。  
住不退転 彼土の益。第十八願の行者が命終時に浄土に往生して、  
不退転の位に住する

現益  
即 同時即。信一念の受法と得益が同時。

【参考】『大智度論』(T25・313c)

T1509\_25.0313c25: 即時。即時有二種。一者同時。二者雖久更  
T1509\_25.0313c26: 無異法。

Q 信一念に即得往生の益がある。即得往生とは何か。  
A 現生正定聚。  
Q 文証如何。

A 『一念多念文意』(二、六六一)  
「即得往生」といふは、「即」はすなはちといふ、ときをへず、日をもへだてぬ  
なり。また「即」はつくといふ、その位に定まりつくといふことばなり。

「得」はうべきことをえたりといふ。真実信心をうれば、すなはち無碍光仏の御  
ころのうちに オサメトリタマフトナリ 撰取 して捨てたまはざるなり。撰はをさめたまふ、取は  
むかへると申すなり。 ワウシヤウススキミトサタマルナリ をさめとりたまふとき、すなはち、とき・日をもへだて  
ず、正定聚 の位につき定まるを「往生を得」とはのたまへるなり。

Q 即得往生の義を説明せよ。  
A 即 即時に即位する  
得 うべきことをえたり。往生すべき身と定まる。

Q このとき往生はどういう往生か。  
A 当来の難思議往生をさす。  
Q 「即得」を現生で往因定まるとする釈例如何。  
A 『行文類』六字釈(二、三六)

必得往生といふは、不退の位に至ることを彰すなり。『経』(大経)  
には「即得」といへり、釈(易行品)には「必定」といへり。「即」の言は願力  
を聞くによりて報土の真因決定する時剋の極促を光闡するなり。「必」の言は「審  
なり、然なり、分極なり、」金剛心成就の貌なり。

Q 他に「即得往生」を現生正定聚とする文証ありや。

A 『唯信鈔文意』(二、六九〇)

「即得往生」は、信心をうればすなはち往生すといふ、すなはち往生すといふは不退転に住するをいふ、不退転に住すといふはすなはち正定聚の位に定まるとのたまふ御のりなり、これを「即得往生」とは申すなり。「即」はすなはちといふ、すなはちといふはときをへず日をへだてぬをいふなり。

Q 即得往生の義を説明せよ。

A 即時

即得往生 不退転に住するをいふ。

メモ

上の信心と下の利益

「聞其名号信心歡喜乃至一念至心廻向願生彼国」「即」「得往生住不退転」

Q 現生正定聚を裏付ける根拠如何。

A 撰取不捨の故に。

Q 文証如何。

A 『一念多念文意』(六六三)『唯信鈔文意』(六九〇)。『銘文』(六〇五)。『ご消息』に多数。

Q 正定聚を誓った願は第何願か。

A 第十一願。およびその成就文。(証文類より)

【2】 必至滅度の願文、『大経』(上)にのたまはく、「たとひわれ仏を得たらんに、国のうちの人・天、定聚に住し、かならず滅度に至らずは、正覚を取らじ」と。(以上)

【4】 願(第十一願)成就の文、『経』(大経・下)にのたまはく、「それ衆生

ありて、かの国に生るれば、みなことごとく正定の聚に住す。ゆゑんはいかん。

かの仏国のうちにはもろもろの邪聚および不定聚なければなり」と。

Q 「国中人天」「生彼国者」の人が正定聚ならば当来彼土というべし。

A 宗祖は正定聚は信心定まる現生でいう。

Q 宗祖がそう見込まれた根拠如何。

A 如来会成就文

【6】 またのたまはく(如来会・下)、「かの国の衆生、もしまさに生れんもの、みなことごとく無上菩提を究竟し、涅槃の処に到らしめん。なにをもつてのゆゑに。もし邪定聚および不定聚は、かの因を建立せることを了知することあたはざるがゆゑなり」と。(以上抄要)

Q 文意如何。

A 邪定聚・不定聚が浄土に生まれないのは 不能了知建立彼因 だから。

反顕すれば

正定聚 が浄土に生まれるのは 能了知建立彼因 だから。

「能了知建立彼因」は仏願の生起本末を聞くことだから現生。

Q 他に「即得往生」を現生で往因定まるとする釈例はあるか。

A 『愚禿鈔』(二一、二一八)

信<sup>ニ</sup>受<sup>スル</sup>本願<sup>ヲ</sup> 前念命終<sup>ナリ</sup>。

「即<sup>チ</sup>入<sup>ル</sup>正定聚之數<sup>ニ</sup>」文」

即得往生<sup>ハ</sup>、

後念即生<sup>ナリ</sup>。

「即<sup>ノ</sup>時入<sup>ル</sup>必定<sup>ニ</sup>」文」

「又「名<sup>ニ</sup>必定<sup>ノ</sup>菩薩<sup>ト</sup>也」文」

Q 信受本願と即得往生とが前後で語られてあるのはどういう意味か。

A 論理的前後であつて時間的前後では無い。ともに信の一念時剋の極促なので時間の前後は立たない。

Q では論理的前後とはどういう意味か。

A 信心を得るから正定聚に定まる。信を得ることが主である。

Q 逆は成立しないのか。

A しない。正定聚に定まるから信心を得るという構造はない。

【参考】命終とは

無始以来、輪転六道の妄業ほろぼされて、凡夫自力の迷心の命が終わる

『浄土真要鈔』(四、四九三)

「一念といふは信心を獲得する時節の極促を顯す」(信巻・意)と判じたまへり。しかればすなはち、いまいふところの往生といふは、あながちに命終のときにあらず、無始以来、輪転六道の妄業、一念南無阿弥陀仏と帰命する仏智無生の名願力にほろぼされて、涅槃畢竟の真因はじめてきざすところをさすなり。すなはちこれを「即得往生 住不退転」と説きあらはさるるなり。「即得」といふは、すなはちうとなり。すなはちうといふは、ときをへだてず日をへだてず念をへだてざる義なり。されば一念帰命の解了たつとき、往生やがて定まるとなり。うるといふは定まるころなり。この一念帰命の信心は凡夫自力の迷心にあらず、如来清浄本願の智心なり。

③の1 回向(論註) 能回向の主体、所回向の法

Q 『論註』の回向の文を挙げよ。

A

『論註』起観生信章 回向門(一、四九二)

云何が回向する。一切苦悩の衆生を捨てずして、心につねに願を作し、回向を首となす。大悲心を成就することを得んとするが故なり。

「回向」に二種の相あり。一には往相、二には還相なり。

「往相」とは、おのが功德をもつて一切衆生に回施して、共に彼の阿弥陀如来の安樂浄土に往生せんと作願するなり。

「還相」とは、かの土に生じをはりて、奢摩他・毘婆舍那を得、方便力成就すれば、生死の稠林に回入して一切衆生を教化して、ともに仏道に向かふなり。もしは往、もしは還、みな衆生を抜きて生死海を渡せんがためなり。このゆゑに「回向を首となす。大悲心を成就することを得んとするがゆゑなり」といへり。

Q 回向は誰がするのか。

A 浄土願生の行者および浄土に於いて自利利他する菩薩。

Q 何を回向するのか。

A 己が集むるところの一切の功德。

『論註』善巧撰化章(一、五一九)

凡そ「回向」の名義を釈せば、謂く、己が集むるところの一切の功德を以て一切衆生に施与して、共に仏道に向かふなり。

A Q 己が集むるところの一切の功德とは何か。  
往相では五念門中の前四念門の行徳。還相では五功德門中の前四功德門の行徳。

利他	回向 (往相回向)	願生行者 此土	自利 礼拝 讚嘆 作願 觀察 觀彼世界相 觀仏本願力	実相身 為物身 一心 第十八願 十念往生	往生した行者 彼土	第十一願 彼土正定聚 第十二願 超出常倫
		園林遊戯地門 (還相回向)	近門 大会衆門 宅門 屋門	第十念往生	第十一願 第十二願 超出常倫	

仏願力によってこれらの因がととのうから、速得成就阿耨多羅三藐三菩提する(三願的証) 超出常倫 菩提を得る常倫のスピードを超出している

### ③の2 回向(宗祖義) 能回向の主体、所回向の法

Q 往還二回向をものがらとするものは何か。

A

①浄土真宗

『教文類』(135)

浄土真宗を案ずるに、二種の回向あり。一つには往相、二つには還相なり。

②本願力回向

『浄土文類聚鈔』(478)

しかるに本願力の回向に二種の相あり。一つには往相、二つには還相なり。

③南無阿弥陀仏

『正像末和讃』五一首(609)

南無阿弥陀仏の回向の 恩徳広大不思議にて

往相回向の利益には 還相回向に回入せり

Q 浄土真宗、本願力回向、南無阿弥陀仏、三つの違いは何か。

A 本質的に一つのものがらを明かしている。

浄土真宗

教法の特質を宗名として顕した

本願力回向

教法の特質を一言で顕した

南無阿弥陀仏

本願力回向の具体的顕現相

(「真宗要論」梯實圓和上 46頁行信教校刊)

Q 本願力回向のようす如何。

A 往相の回向 本願力によつて教・行・信・証が回向される。

還相の回向 証果の悲用として、従果還因し普賢の徳を行ずる。

Q 回向するのはだれか。

A 阿弥陀仏。

Q 往相還相するのはだれか。

A 衆生。往相還相せしめるのは阿弥陀仏の本願力。

Q 文証如何。

A 『信文類』欲生釈の『論註』引文(二、八八)に約仏の訓点を施してある。

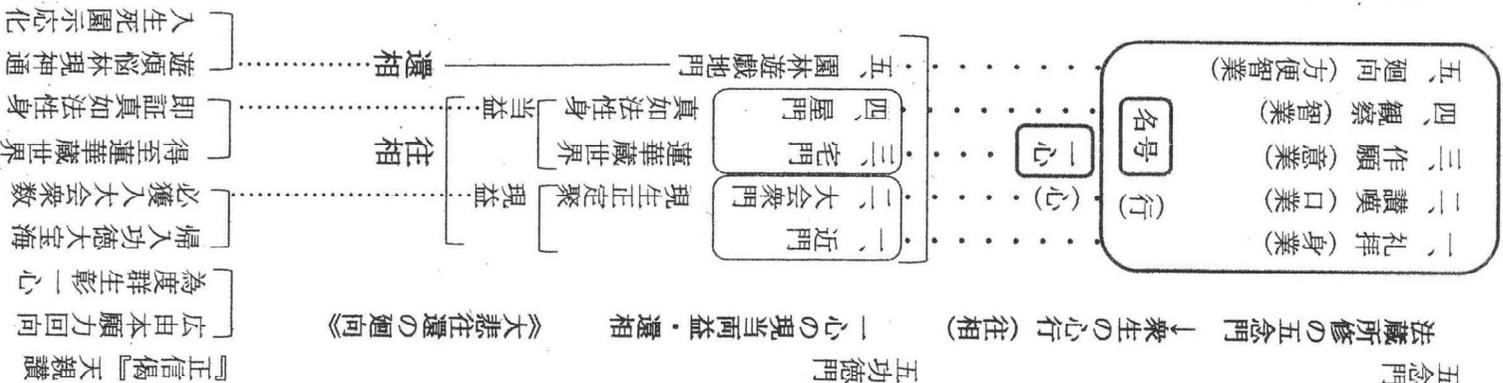
「いかんが回向したまへる。一切苦悩の衆生を捨てずして、心につねに作願すらく、回向を首として大悲心を成就することを得たまへるがゆゑに」(浄土論)とのたまへり。回向に二種の相あり。

一つには往相、二つには還相なり。往相とは、おのれが功德をもつて一切衆生に回施したまひて、作願してともにかの阿弥陀如来の安樂浄土に往生せしめたまふなり。還相とは、かの土に生じをはりて、奢摩他毘婆舍那方便力成就することを得て、生死の稠林に回入して、一切衆生を教化して、ともに仏道に向らしめたまふなり。

還相とは、かの土に生じをはりて、奢摩他毘婆舍那方便力成就することを得て、生死の稠林に回入して、一切衆生を教化して、ともに仏道に向らしめたまふなり。(本願寺本・高田本「向らしめたまふなり」)

もしは往、もしは還、みな衆生を抜いて生死海を渡せんがためにしたまへり。このゆゑに「回向為首得成就大悲心故」とのたまへり

法蔵菩薩が修行された五念門の五念二利の徳は、浄土の清浄功德（観彼世界相）と、仏の不虚作住持功德（観仏本願力）に撰められる。その仏徳を願したのが、「帰命尽十方無碍光如来」の名号である。これが大行である。この大行を領受したが、無疑の一心である。『浄土論』の初めの帰敬偈「世尊（教） 我一心（信） 帰命尽十方無碍光如来（行） 願生安樂国（証）」は、この心行を明かしている。つまり他力の信心は、名号大行を領受した無疑の一心であり、この大信はそのまま如来の大悲心であるから、現生には正定聚、当来には大涅槃の益を得て、還相廻向の悲用も表すのである。

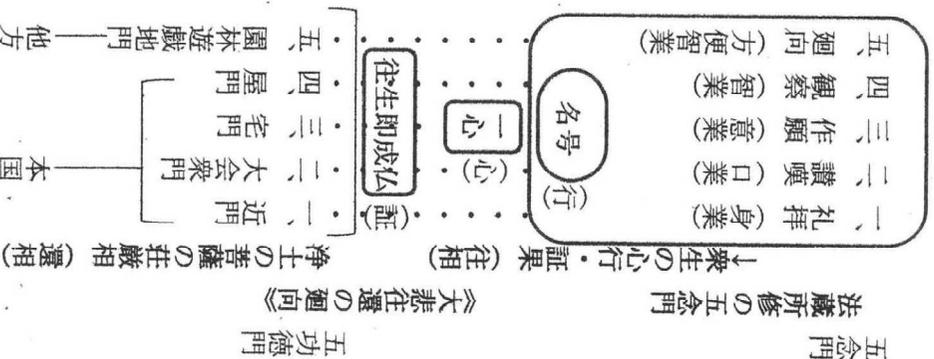


『正信偈』天親讃  
広由本願力回向  
為度群生彰一心  
歸入功德大宝海  
必獲入大会衆教  
得至蓮華藏世界  
即証眞如法性身

還相  
遊煩惱林現神通  
入生死園示忘化

往相  
眞如法性身 当益  
現生正定聚 現益

◆親鸞聖人①（五功德門の配当は、『証文類』の『論註』引文による）



還相（從異還因の相状）……広

還相（還來穢国の相状）……狭

□二、還相の本義

- Q 宗祖の還相の積相如何。
- A 還相が『証文類』に明かされるように、往生即成仏（滅度）するとその証果の悲用として直ちに従果還因して、因人の相を顕現し衆生を教導する。
- Q 証果に還相の悲用があると見込まれたのは何によるのか。
- A 第二十二願文による
- Q 還相は従果還因に限るか。
- A 従果還因の相に他方摂化があり、還来穢国する。

『証文類』(二、一三七)

則是出於必至補処之願。亦名一生補処之願。亦可名還相回向之願。

『略典』(二、一六五)

即是出於必至補処之願。亦名一生補処之願。亦可名還相回向之願。

設我得仏 他方仏土 諸菩薩衆 來生我國 究竟必至 一生補処	除其本願 自在所化 為衆生故 被弘誓鎧 積累徳本 度脱一切 遊諸仏国 修菩薩行 供養十方 諸仏如來 開化恒沙 無量衆生 使立無上 正真之道	超出常倫 諸地之行 現前修習 普賢之徳	若不爾者 不取正覺
願事	除	除	除
文当面 (一、二六) 本国位相 一生補処	本国位相 他方摂化	論註 (一、五二八) 超出常倫	宗祖 (二、一三九) 必至補処還相回向 本国位相と他方摂 化全体が還相
無上正真之道に立 せしめ、 常倫諸地の行を超 出し、現前に普賢 の徳を修習するを 除く	無上正真之道に立 せしめむをば除く	無上正真之道に立 せしめむをば除く 常倫諸地の行を超 出し、現前に普賢 の徳を修習せむ	無上正真之道を立 せしめむをば除く 常倫に超出し、諸 地の行現前し、普 賢の徳を修習せむ

□三、往還の境目

教	大無量寿経	第十七願	諸仏称名願	能詮の言教	往相
行	称無碍光如来名	第十八願	至心信楽願	因	正業(所信) 正因(能信)
信	信心	第十一願	必至滅度願	果	
証	無上涅槃之極果	第二願	還相回向願	果の悲用(利他教化地の益)	還相
真仏土	利他円満之妙位	第十二願	光明無量願	衆生趣入の土	
	不可思議光如来	第十三願	寿命無量願	如来摂化の源	
化身土	無量光明土	第十九願	至心発願願		
	方便	第二十願	至心廻向願		
	淨土				
邪偽	聖道				
	外教				

『証文類』(二一、一二七)

【一三】それ真宗の教行信証を案ずれば、如来の大悲回向の利益なり。ゆゑに、もしは因、もしは果、一事として阿弥陀如来の清淨願心の回向成就したまへるところにあらざることあることなし。因、淨なるがゆゑに果また淨なり。知るべしとなり。

【一四】二つに還相の回向といふは、すなはちこれ利他教化地の益なり。すなはちこれ必至補処の願(第二二願)より出でたり。また一生補処の願と名づく。また還相回向の願と名づくべきなり。『註論』論註に頷れたり。ゆゑに願文を出さず。『論の註』を披くべし。

□四、現生往生と信後還相の異義(未稿メモ)

Q 『唯信鈔文意』「信心をうればすなはち往生す」の文にある「往生す」とは如何なる状態をいうのか。

A 次下の文に示されるとおり、不退転に住する、正定聚の位に定まることをいう。

Q 現生に「不退転に住する」、「正定聚の位に定まる」ことを「往生す」といつていいんですね。

A よくない。あくまで往生という状態は臨終の一念に開かれる証果を意味する。

今は、成就文「即」の言を中心に信益同時を所顕とする。故に「即得往生不退転」全体を「すなはち往生す」と読んでいるが、内容は「不退転に住する」、「正定聚の位に定まる」である。

Q 『論註』では往生のことを「無生の生」としている。どういう意味か。

A 浄土往生の生まれ方は、凡夫の分別思議で捉えている実体のあるような生死ではない。

善知識帰命を主張した書（らしい。読んだことがありません）

『還相回向聞書』（1300 正安）2写。了海著

附：渋谷講師佐々木篤祐氏の解題（昭和三十六年記）

末に「正安二年五月廿九日 釈了海へ卒二歳書之 釈空心相伝之」

京都大学貴重資料デジタルアーカイブ

『他力信心聞書』

大谷派の教学にメスを入れた

『真宗の往生論』小谷信千代氏 法蔵館

『親鸞の還相回向論』小谷信千代氏 法蔵館

『誤解された親鸞の往生論』小谷信千代氏 法蔵館

星野元豊氏 『親鸞と浄土』「獲信のその時、脚下のそこに浄土はすでにきている」

曾我量深氏 「南無阿弥陀仏を信ずる時に未来の往生はすでに現在している。浄土はすでに始まっておる。」

小谷氏への拒絶反応

『近代真宗教学 往生論の真髓』鍵主良敬氏 方丈堂出版

※間違いやお気づきの点があればお知らせ下さい。〒五九九―八一二五 大阪府堺市東区

西野521 旭照寺 山上正尊 senjakuhongan@gmail.com